

第3回 ひとにやさしいまちづくりカフェ 聞き書き記録

記録：星野広美・鬼頭弘子

ひとにやさしいまちづくりカフェ（とりあえず、ひとまちカフェと呼んでいます）の3回目を、8月17日(金)の夜、開催しました。

参加者は、熊本からお越しいただいた平野みどりさんと南部美咲さんを含めて、20名。1回め、2回めより少しだけ増えました。もう少し増えてもいいかな、と思っています。ただ、「直接聴き、話す」という関係を保つには、20~30人程度までだと考えています。

お話しいただいた内容は、できるだけ早く、記録化し、公開することで、多くの方に共有していただきたいと考えています。ひとまち東海のHPに暫定版をアップし、その後、確定版をまとめて記録集として発行していきます。

平野さんとは、熊本へのスタディーツアーや、熊本の講座でお話するためにうかがったりした際にお会いして以来です。お互いに、お久振り~です。

平野さんは、車いすユーザー。熊本県の県議会議員です。平野さんの名刺は、熊本の熊のキャラクター「くまもん」を模ったもの。

南部さんは、熊本県立大学の総合管理学部の地域・福祉ネットワークコースの2年生。夏休みの間だけ、平野さんのところでインターン。大学の試験が終わって、お盆休みが過ぎて、インターン2日めにして、名古屋へ同行。

くまもんオフィシャルサイト

<http://kumamon-official.jp/>

NPO 法人ドットジェイピー

<http://www.dot-jp.or.jp/>

平野さんに、今回お願いしたお題は、「熊本県における“ひとにやさしいまち”への取り組み」。

ヒューマンネットワーク・熊本や、バリアフリー研究会がスタートしたのが、1991年。以来、20年余り。多くの活動を展開し、熊本のまちづくりや障害者の暮らしに、多くの影響を与えてきました。それは、熊本県や熊本市の取り組みとも関わるものでした。

星野広美の趣旨説明の後、平野みどりさんに、お話ししていただきました。

平野さんは、前振りの後、パワーポイントとプリント資料とを使ってお話を進められました。パワーポイントは、県の施策宣伝みたい…と話されながら。

お話は、村上さんのお話から始まりました。

熊本県における

“ひとにやさしいまちづくり”への取り組み

平野みどり（熊本県議会議員

／ヒューマンネットワーク熊本）



村上博さんと、ヒューマン、バリ研のこと…

名古屋での人にやさしい街づくり連続講座等に何度もみえている村上博さん…熊本市議をやっていた村上さんは、昨年の統一地方選挙では、残念ながら、落選。

バリアフリーの運動を、村上さんが中心になってやってきた。

ヒューマン(特定非営利活動法人 自立生活センター ヒューマンネットワーク熊本)とバリ研(バリアフリーデザイン研究会)は、共に1991年に立ち上がった。ヒューマンの村上博さん、バリ研の事務局長の白木力さんが中心になって取り組みを進めてきた。

残念ながら、バリ研の白木さんは亡くなられて、他の方が引き継いでいるが、白木さんほどには求心力が無く、私も参加しているが、以前に比べると活動はスローダウン気味だ。

ヒューマンは、名古屋ではAJU自立の家のような団体といえばわかりやすいでしょうか。人権の取り組みをやり始めて…私たちが地域の中で活動するには、乗り物にも乗れない、トイレの数も足りない、そういうことへの取り組みを始めた。

そのとき、1991年、2つの団体が立ち上がった。

特定非営利活動法人 自立生活支援センター ヒューマンネットワーク熊本

<http://www15.ocn.ne.jp/~cilhuman/index.htm>

バリアフリーデザイン研究会

<http://www.barrier-free.jp/>

<http://www.barrier-free.jp/concept/>

3代の知事

熊本県知事は、今は、蒲島郁夫(2008年4月から)。その前は、潮谷義子(2000年4月から2008年4月)、さらにその前は、福島譲二(1991年2月から2000年2月)。

福島さんには、脳性まひのお子さんがいて、やさしいまちづくりをしたい、という思いがあった。その頃の行政は、障害者団体は、文句を言う団体という認識だった。

福島さんが亡くなって、次に潮谷さんが知事になって、「UD(ユードイヤー)」、「ユードイヤー」と言っていた。その中で、バリアフリ

ーは終わった、バリアフリーよりユニバーサルデザイン(UD)の方が上、ということを書いて、障害者団体と噛み合わないところもあった。

しかし、知事直轄の部署に、UDを持っていった。それまでは、福祉とか、建築とかにあったが、それが、知事直轄に。UD(ユニバーサルデザイン)とPS(パートナーシップ)、この2つを取り入れないと…ということで、各部署が取り組んでいた。そして、UDを根付かせていった。

今は、蒲島知事。「夢実現」とか、「幸せ実感」と言っている。蒲島さんになって、UDがトーンダウンしたかということ、トーンダウンはしていない。九州新幹線が開通したが、全国から熊本に来てもらいたし、安心して楽しんでもらえるようなまちづくりを進めるのは当然の流れだ。

全国で、4つめの差別禁止条例(障害のある人もない人も共に生きる熊本づくり条例)を、昨年つくった。条例実現の背景には、私も応援した蒲島さんに、知事選挙のマニフェストに、障害者差別をなくす条例をつくると入れさせたことが大きい。条例をつくるということで、議会や担当部が学ぶ機会になって、県庁全体で取り組んだ。「合理的配慮」ということは、難しいことだが、環境を変えていくということなくしては、差別禁止は進まない。「障害」を個人の責任にする医療モデルから、社会モデルへ転換していく。

ユニバーサルデザイン・ネットくもと

<http://www.pref.kumamoto.jp/site/ud/>

障害のある人もない人も共に生きる熊本づくり条例

2012年4月1日施行

<http://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/law/anti/kumamoto.html>

国際生活機能分類－国際障害分類改訂版－

<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2002/08/h0805-1.html>

この後、スライドを使って、熊本県の取り組みを紹介。



熊本県のこれまでの取り組み

熊本県のやさしいまちづくり条例は、1995年4月に施行されている。

そして、やさしいまちづくり推進計画は、第1期が1996年から2001年、第2期が2002年から2010年、第3期が2011年から2016年。

また、くまもとUD振興指針を2002年2月に策定している。

UD施設のモデルづくり

県民に身近な県有施設でのUDモデル事例づくりということで、取り組んでいる。それが、民間等の施設でのUDの取り組みに波及している。

ヒューマンは、肢体の障害者が中心で、聴覚障害者や知的障害者の団体と一緒に、施設づくりにあたって、意見を言ってきた。

JR水前寺駅と光の森駅は、1日5千人以上の乗降客がある駅で、改良された。

ヒューマンは、九州新幹線の新八代駅や新水俣駅にもかかわった。

サントリー九州熊本工場やイオンモール熊

本クレアには、ヒューマンは関わっていないが、UDの取り組みがされている。

熊本県庁UDでは、通路の手すりは、最初は1段だったが、それではダメだということで、2段になっている。

健軍くらしささえ愛工房は、県営住宅の1階にある施設。地域の縁がわということで、小規模多機能、ディサービス、訪問介護、地域生活支援事業、配食サービス、子ども預かり、障害者が働く喫茶、を入れた。潮谷知事の御自慢の施設で、視察が来ると、自ら案内されたりした。

県民アンケート調査

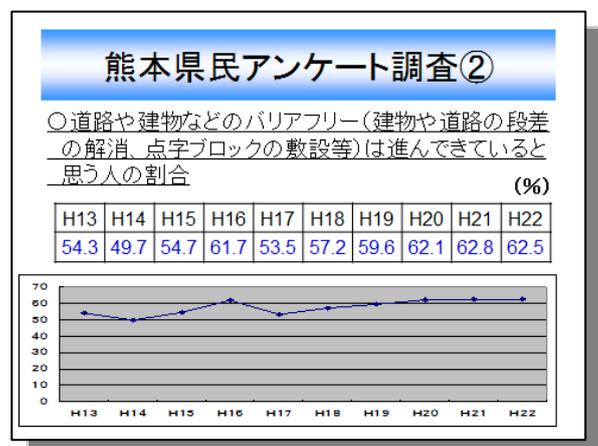
UDについて、県民アンケート調査をしている。

その結果では、UDについて知っている人の割合は、年々増えてきているが、理解率は伸びが止まっている。

道路や建物などのバリアフリーが進んでいると思う人の割合は、増えてきている。しかし、10年スパンでみると、これだけか、という数字だ。

「自分の住む地域ではまだまだ」という回答の割合が高く、熊本市域と、それ以外の市町では差がある。

障害者団体がそれぞれの地域にあるわけでもなく、私たちが熊本市中心の活動になる。



重点プロジェクト

権島知事になって、「やさしいまちづくり推進計画」の第3期計画をつくっている。

6つの重点プロジェクトを掲げているが、UDという言葉は、6つめの「対話によるUD空間整備促進事業」というところに出ている。潮谷知事のときのように、何にでもUDではないが、施策は引き継がれている。

熊本県やさしいまちづくり推進計画

<http://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/25/yasamachi/keikaku.html>

重点プロジェクトの1つめは、「おでかけ安心トイレ普及事業」。

障害を持った人たちにとって、安心なのは、どこに使えるトイレがあるかわかっていることだ。運動を始めた頃は、使えるトイレは、デパート、市役所、県庁ぐらいにしかなかった。そこを中心に行動していた。

トイレは増えてきた。車いす対応トイレ、オストメイト対応トイレ、おむつ交換台付きトイレは、増えてきた。障害当事者だけではない多くの人が使うようになった。今では「待ち」があるくらいだ。

協力施設を募集し、その情報を、携帯サイトでチェックできる。

2つめが、「ハートフルパス制度の九州全域展開事業」。

	障がい者用駐車証		心付パス制度	
	発行枚数	有効枚数	発行枚数	有効枚数
11年度末	508	5,104	0	0
12年度末	742	7,153	2,966	2,966
13年度末	286	10,187	2,012	2,012
12年度末	1,054	10,000	5,000	5,000
13年度末	1,257	28,85	17,968	5,000

ハートフルパス(障がい者用駐車場利用証)は、熊本、長崎、佐賀の3県でスタート。その後、鹿児島、山口も加わって、5県に。今は、全国26府県で相互利用が可能になっている。

カードを持っていない人が、障がい者用駐車場を使うことがあるが、週末のスーパーなど大規模店舗では、警備員がチェックして、パスが無いと、「ここには停められません」と移動を促す。警備員のいない平日より、警備員のいる週末の方が、私たちにとっては、駐車場が空いていて使いやすい。

交付件数は、年々増えている。協力施設数は、1000を超えている。

カードには2種類あって、オレンジ色は、妊婦や骨折したなど一時利用、グリーン色は、障害が常態化している人が使う。

3つめは、「ハートフルサポーター育成事業」。

宿泊、小売・飲食、交通事業の人たちに、理解してもらうことは、大きい。そこで、事業者向けの研修をしている。

ヒューマンが講師としてやっているわけではないが、私たちがバリ研と一緒にプログラムを作ったのを、県がパクった。それはそれでいい。県がやって受講者が増えて、広がるなら、それでいい。

4つめは、「やさまち発見隊事業」。

バリ研が、「バリアフリーデザイン賞」の取り組みをしていた。現在は、県が行っている。これもパクってくれた。これもいい。

ヒューマンは、小学校、中学校とか、高校で、バリアフリー体験講座を、設立当初からやってきている。私たち自身が講師をやり、障害者の話を聞いてもらうことが大事だ。

5つめは、「災害時のバリアフリーウォッチ事業」。

熊本の、海に面している天草では津波もある。まず、モデル事業を天草でやった。

地域々々でのこういう取り組みはとっても大事。

6つめは、「対話によるUD空間整備促進事業」。

NPO法人に、設計段階等での当事者意見の聴取等に係るプロデュースを委託している。

UDくまもとというNPO法人がある。これは、県がバックアップしてNPO法人にしている。当事者の女性が代表だが、ここも肢体障害者ばかりで、聴覚、視覚の障害者団体と連携してやっている。

UDくまもと公式ブログ「みなよか日記」

<http://udkumamoto.blog.ocn.ne.jp/blog/>

新幹線の駅整備の際、実際にどうなっているか、使ってみないとわからない、ということで、実物大のモックアップをした。そのやり方が、広がっている。県でも、県民総合運動公園での工事で、トイレのモックアップを使って検証した。実物大でつくって、経験して、ということ。



その他UD関連の取り組み

UDパンフレットの作成、配布をしている。

小学生向けのもので、1学年分つくっている。熊本県の1年生は、みんな持っている。

みんなで考えよう ユニバーサルデザイン(UD)小学生用

<http://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/25/1024509.html>

やさしい宿づくり手帖

<http://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/25/yasashiiyado.html>

やさしい店づくり手帖

コミュニケーションブック～外国人のお客様や耳や言語の不自由なお客様とのゆびさし会話集～

<http://www.pref.kumamoto.jp/site/ud/1058570.html>

また、熊本県ユニバーサルデザイン建築物整備促進事業という、UD整備への補助制度もある。

民間事業等への支援

地域共生くまもとづくり事業や、地域の支事(しごと)おこし事業をしている。

地域の支事(しごと)おこし事業では、ソーシャル・ファームの啓発のためのシンポジウム開催もしている。ソーシャル・ファームは、ヨーロッパが起源だが、障がい者、引きこもり、難病を持った方等の働く場をつくる取り組みで、北海道でやっているの、「熊本でもやります」と宣言した。

以上が、熊本県の事業の紹介。

ヒューマンのバリアフリー部門の取り組み

次に、ヒューマンのバリアフリー部門の活動を紹介。

NPO法人ヒューマンネットワーク熊本のバリアフリー推進事業部の「2011年度バリアフリー推進事業報告」という資料を順に。

①県の都市計画課と「新水前寺駅」の現地調査へ出席。

新水前寺駅は、路面電車と交差するところに駅をつくった。上下移動、乗り換えを考え

る必要があった。これまでは、1 kmほど離れたところ水前寺駅があるが、離れているので、使っていなかった。新水前寺駅は、駅の真下に、電停があるので、乗り換えに便利。しかし、商店からは、工事騒音や、人の流れが変わって、商売があがったりになるからと、反対されていた。交渉の末、事業化されたものの、駅舎の構造に関する情報が得られず、とり入れられた意見としては、手すりに貼る点字シールの標記内容まで。

② 熊本市「森都心プラザ」の完成報告会へ出席。

ここでは、形ができてしまってから、意見下さい、というものだった。

③ 熊本市「子どもセンター」の工事現場に入っの現地確認。

ここは、建設のための意見聴集会から参加していて、多目的トイレの昇降式便座が導入された。

④ 「阿蘇くまもと空港」国内線ターミナルビルの工事現場に入っの最終確認。

今年8月にグランドオープンした。十分とはいえないが、大きなエレベーターも入った。皆さんも阿蘇空港を使うことがあるかもしれない、そのときには意見を下さい。

⑤ 「熊本合同庁舎B棟」建設のヒアリングへ出席。

熊本市には、いくつかの国の機関が残っている。熊本城の中にあっのを、市が買い取り、月星ゴムの跡地を国が買って、合同庁舎をつくった。A棟ができてから、次は無いかとみていたが、B棟を建設することになった。

建設にあたり、他の障害者団体と一緒に、意見を出した。特に、サイン計画について意見を述べた。

⑥ 「自立生活支援事業部」との「合同自立生活プログラム」の実施。

4回シリーズで今年も熊本市内のホテル調査を実施。

自立生活や社会参加についての知識を得たり、スキルアップの一環として、若い仲間を調査に連れて行く。若い仲間からも意見が出て、次の提案につながったりする。

⑦ 熊本市公園課に「公園の多目的トイレ」についての要望書の提出。

公園の多目的トイレは、衛生的にも問題だし、鍵が掛かっていたりする。私は使わないが、夜のイベント時など、どうしても使わないといけないときもあるので、仲間たちが、熊本市に要望書を提出した。

⑧ 熊本市交通政策総室より市電の電停の改修計画の情報収集。

市長直属の交通政策総室ができて、市電の電停の改修計画を進めている。

低床車両のLRT (Light Rail Transitの略) は入ったが、乗り降りできる電停があまりにも少ない。昨年も2ヶ所整備したが、35ヶ所のうち、12~13ヶ所しか使えない。今、20分おきくらいにLRTが来るが、乗れる電停が少ない。

今までは、県道、県警だったが、政令市になって、県道を市が管理するようになって、これからは進んでいけばいいのだが。

道路の中央の島で乗り降りするのではなく、サイドリザーションで、歩道側で乗り降りできるようにするといい。熊本駅から中心地側ではない方へは、1駅分、サイドリザーションになっている。ほかでも取り入れられる電停はないか、検討できるとよい。

熊本市交通局

<http://www.kotsu-kumamoto.jp/>

⑨熊本市、西、東区役所の完成見学会への出席。

政令市になって、5つの区ができた。中央、東西南北の5つ。西と東の区役所をつくった。

西区役所新庁舎建設には初めから関わったのだが、サイン計画がよくなく、センスがないものになっている。

⑩地域活動支援センター「いんくる」の「バリアフリー調査隊」。

「いんくる」は、ヒューマンの兄弟団体。

全障害の方が、活動に参加される。バリアフリー推進事業部のメンバーだけでなく、知的障害、精神障害、発達障害など多くの方が参加される。車いすユーザーなど肢体以外のメンバーが参加することで、バリアフリーについて学びが多いと感じる。

「バリアフリー調査隊」が調査する中で、「トイレが酷いぞ」と、⑦の公園の多目的トイレの要望書の話がでてきた。

運動の継承

障害者運動的には、1991年にヒューマンとバリ研ができたが、当時は元気だった障害者たちが、今は、高齢化してきている。次の世代に、精神をどう伝えていくか？

最近のスタッフは、これまでの蓄積の結果を、元々あったものとして享受している。

まだまだ不備な部分はある。行政との話し方も伝えたい。次の世代の育成は、大きな課題。

まちの変化

ひとにやさしいまちに、熊本県はなっているか？…私が障害を持った20年前と比べると、格段に良くなっている。不備を訴えるときも、障害当事者の意見を生かしていく、そうじゃないといいものがない、と当たり前前に受け取ってもらえる。

でも、行政と障害者団体がつきあうことが

多いが、行政では担当の人が変わると、また、一から伝えないといけない。それは、障害者団体の悩みだ。でも、それだけ、別の人に伝えることで、理解する人が新しく増えていく、と考えている。



学校のバリアフリー化

学校のバリアフリーは、まだまだ。耐震改修工事はどんどん進む。ついでに…と思うが、なかなかそうはいかない。

障害を持つ子どもが学校に入ることで、その学校にはエレベーターが無いということで要求したが、その子が卒業したあとでエレベーターができたという笑えない話もあった。

最近では、入ってくる…ということがわかると、中学校と連携して、事前に、手すりやスロープを整備したり、エレベーターまで準備した例もある。そういうことでは、良くなった。

しかし、エレベーターも無いし…と最初からあきらめている場合もある。正しい情報…入るならエレベーターを県は付けるということ、伝えていくことが必要だ。

途中で障害になると、直ぐにはできないが、それでも、1年経ってできた、ということも聞いている。

声を出していけば、予算がなくて無理という声は、県立高校では聞かない。しかし、市町村の小、中学校は、たくさんあって難しい。エレベーターを設置してくださいと言っても、

難しい。小学生だと、小さいので、先生がおぶったり、昇降機を使ったり、教室を1階にもってきたりする。中学生になると、体も大きいので、エレベーターをなんとかしたい。友だちがおぶって、といっても、喧嘩もするだろうし、上下移動は、危険も伴うし、なんとかしてエレベーターを設置していきたい。

1990年代の初めに1年間住んでいたアメリカでは、広大な敷地で、1階建てになっているから、上下移動の問題はない。日本では、敷地が狭く、1階建ての学校をつくることは無理だろう。

新築では、エレベーターを付けるようになってきている。

養護学校、特別支援学校でなく、地域の学校に入る子どもが増えてきた…ということで、「エレベーターは要らないだろう」とはならず、当たり前のように付けておこう、となる。UDからすると、障害を持った子だけでなく、障害者法定雇用率を達成していない熊本県では、障害を持った教員も、職員もどんどん入ってもらわないといけない。障害を持った親が、学校行事やPTAに参加することもある。妊産婦の教員も、たいへんだということを知っている。そういう意味では、複数階の学校にはエレベーターは、当たり前のようにつけないといけない。



地域から

最近、韓国へ行った。よく行く。
韓国では、障害者差別禁止法ができた。

今の大統領は、福祉に予算を付けない。障害者からは、「早く変わってくれ」といわれている。

ソウルのまちを、車いすで行くと、道路ががたがたでお尻が痛くなる。中心地の明洞(ミョンドン)でさえも、まだまだだ。日本や熊本の方が、バリアフリーは進んでいる。

日本では、法律はなくても、地域で進んできた。法律は予算につながるのだから、地域から変えていくということも、とても大事。

バリアフリー

始めのひとまちカフェの趣旨説明で、「進んだ部分もあるが、驚くほど停滞している部分もある。」と言われたが、これほどお金を掛けてやってきたのに…まあこの程度か、という気持ちだ。

小さな店舗、ブティック、飲食店…ちょっとした店は階段しかなくて、上へ下へ、中2階、半地下、地下の店が本当に多い。どこか安心して食べに行ける場所はありますか？と聞かれて、困る。安心して食べてもらえるには道半ばだ。

議会でも言っているが、なかなか実現しないのが、リフト付き観光バス。

熊本県には、1台も無い。他県から借りてくる。

市議会では、村上さんがした質問で、民間が取り組むのに対して、市が助成するという答弁があった。

県は、それも言わない。

私が視察に行く時は、行った先で手配できるので、OK。なのに、熊本に来ると、無い。本当に恥ずかしいなあ〜、と。

リフト付き観光バスのために、今、民間の福祉法人の理事長が、ポケットマネーを出すとやっている。

他県からリフト付き観光バスを借りるため、

期間があれば準備できる。支援学校の子どもの修学旅行にも使いたいが、現状ではなかなか使えない。観光では、障害者の子ども、人が、スッポリ抜けている。

県議会の質問で、私も、「潮谷知事のように、UD宗教みたいにもって行くのはおかしい、バリアを無くすという取り組みが基本にあって、さらに、ひとにやさしいまちということが念頭にあってのUDだ」と言った。

蒲島知事になってからは、条例づくりが忙しくて、バリアフリー、UDの県の取り組みをやってきていないので、いい機会なので、検証して、今後、議会で質問していきたい。

熊本市が政令市になって、県から熊本市がスッポリ抜けた。しかし、後押しして、政令市熊本を良くしていく。また、熊本市以外の地域をどう支援していくか。熊本市との連携をしっかりとらせて、と。

災害時にもやさしい地域に…

来週、仙台へ行く。障害を持つ議員の会の、年2回の定例会が、仙台である。

熊本にも、被災地から子どもたちが来ている。自立生活センターにも。

東北の人は我慢強いというが、障害者のことを行政にしっかり伝えていないようで、行政も家族の介護に頼ってきたようだ。

防災計画を立てる中で、サービスを利用していない障害者はいないか、と聞かれる。日頃からサービスを受けていると、周りの人たちに認識されやすい。このことは大変重要。

非常事態が起きても、やさしい地域になって欲しいし、やさしい地域にしていきたい。

…ということで、お話は、一旦、終わり、質問へ。

■ 質疑に答えて ■

● 2004年に、スタディーツアーで熊本へ行った。まちで障害者の姿を見かけなかった。現在はどうか？

熊本では、障害者が、地域で生活する、家を見つける…ということについてどうか？

(平野) 今は、市内では、車いすの人を見かけるようになった。8年前から比べて、劇的に…ということでもないが。

自立支援法で、大規模施設から地域へと促しはあっても、長年施設にいる人は、地域へと言っても難しい。

熊本市の評判が良くないのは、熊本市に県内の障害者を集中させたくないということなのか、流入による負担増を嫌って、介護利用量を少なく認定しているのではないか、という声がある。必要時間数を出してもらえないと思うと、地域暮らしは難しいと思ってしまう。介護時間数は、政令市の中で、ドン尻。今年、厚労省から役人が、熊本市障害福祉課長で来たので、彼に変えてもらいたいが…。

高齢化は、全国的にみて、熊本県は、高い方だ。

車いすの姿が見えてきている。まちの人々も、受け入れないと…という意識が変わってきて欲しい。

地域に住む方の住宅を、不動産業者と一緒に探す仕組みはある。大家さんは、元に戻すなら、と。大家さんにとっては、年金が入る障害者は、安心感がある。きちんとヘルパーさんが入るという安心感もある。最初からバリアフリーでできているものはないので、民間のアパートを改造することになる。

● 今回(7月12日未明からの豪雨)、たいへんな雨だったが、障害者はどうだったのか？

(平野) 阿蘇から、黒川、白川が流れてきて、一緒になる。

蛇行して流れていて、それが、溢れた。

低い土地で、元々、なんでこんな所に建築OKを出したのだというくらい、遊水地にした方がいいくらいの土地だ。遊水地にして移転と言う住民と、全壊していないので護岸をという住民がいる。

死者は1人も出なかった。2階へ避難したり、自治会長や民生委員が動かされたのかもしれない。

南の、市中心部の川の護岸は、8、9割できていて、工事途中のところ、水が出た。

中流域が手つかずで、菊陽や大津（菊池郡菊陽町、大津町）あたりが、全然河川改修されていない。下流は、国、上流は、県。県は、河川整備計画も無かった。

阿蘇は、なだれ。それも、早朝、早い時間に集中して雨が降った。前の晩からわかっていたら、なんとか対策もとれたのだが、住民は暗い中を逃げた。

高齢者、障害者は、どこに住んだらいいか。阿蘇は、岩盤の上に土地が載っていて、ズルッといく。仮設住宅も建設中だが、仮設住宅建設も含めて、安全なところに、住んでいただきたい。

私の住んでいるところも、西区の白川沿岸。避難指示ということで、民生委員がどうなさいますか、と聞いてきた。西区役所へ避難しようと考えていたが、水位が下がってきて、結局、避難しなかった。



● JR九州は、バリアフリーについて積極的か？

(平野) 新幹線が来る前の旧熊本駅で、ソフト、ハード問題を熊本駅に言っても、うちではダメ、本社へ、と言っていた。その頃は、ケンモホロロ。対応が良くなかった。

新幹線ができるということで、駅舎が新築になって、新築計画の中では、しっかり意識を持った人が育ったのかな、と思う。

積極的とか、そういうことはない。私鉄が無いので、比べるものが無い。

● JR在来線は、どうか？

(平野) 酷い。

何時の便にのれ、とか、何日前に申し出る、とか。整備対象の網掛けが、田舎の小さな駅に及んでいないので、熊本では、3駅くらいしか該当しない。

● ヒューマンと、バリ研についてももう少し詳しく教えて下さい。

(平野) ヒューマンは、主体は、当事者。

成り立ちは、障害を持つ人の権利侵害を糾弾することから。施設職員が障害者のお金を勝手に引き出すという事件があった…(1990年、りんどう荘事件)。

権利擁護でスタートしそうだったが、当時、名古屋のAJUや、町田ヒューマンネットワーク等の、自立生活運動が始まっていた。自立生活のプログラムを持ち、自立生活センターとしてスタートしよう、その中に、権利擁護も位置付けて、バリアフリー部門も入れた。

NPO法ができて、NPO法人になり、10人くらいの役員は、みんな障害当事者。

バリ研は、高齢社会に向かう中、片まひの人が家に帰るのをなんとか支援できないか、と、白木さんたち建築士等の専門家が一緒になって、勉強会を始めた。

私が入院しているときに、勉強会をしているので、「見に来んね」と誘われた時からの付き合いだ。

バリ研は、仕事をしている人たちで、当事者の意見が大事だ、自分たちの専門性と当事者の経験則をあわせようと、一緒に活動するようになった。提言（当時は、「文句」と言われた）、勉強会、表彰…マスコミも取り上げて、行政も無視できなくなって、行政が私たちのノウハウを学んでいった。

ヒューマンとバリ研は、お互いに補完できたという関係だったのではないかな。

● 障害者運動をつくってきた第一世代だが、第二世代を育てていくということについては？

(平野) 私たちの日常の活動にかかわってきた人で、これは、という人に、白羽の矢を立てて、支援していく。

「いんくる」には、いろんな人が来る。経験が少ないために自分の力を外に出せない人たちに、経験をしてもらおう。私たちは、それを支える側。

特別支援学校ではない一般の学校で育った、障害を持った人たちはどうか。いわゆる健常者コミュニティの中で育っていて、気付かないといけないことに気付かず、バリアフリーな環境や福祉制度などを、当然あるものとして生活している。良い面もあるが、自分を押し殺している面もある。それがほかの障害当事者と出会うと気付く。

大学生のインターンシップを、年2回受け入れている。2～3年前に出会った学生は、重度障害で熊本県立大生だった。彼は、幼稚園から大学まで、一般の学校へ行っている。高校へ入る時も、事前に、エレベーターを付けて。兄弟も、友だちも、健常者。インターンシップで、いきなり、ヒューマンの活動に入って、目からウロコ。彼は、自分を押し殺してきた部分があったと、自覚したのかもしれない。引き続きヒューマンの活動に入ってきて、この春、大学を卒業して、ヒューマンの職員になった。次世代の仲間として、育て

ていきたい。

ヒューマンの職員にならなくても、何かのときに、ヒューマンに相談しようと思えるようにしたい。

私は、県立高校の職員の支援をもらっているの、教職員の皆さんのそれぞれの学校で、何か障害者に関する情報はありますか、と聞いている。そうして探してきて、活動に引き込むというか、障害のある若い学生たちに世界を広げてもらいたい。

上の世代は、青い芝の時代から始まって、ボランティアを集めて介助してもらって、行政交渉して、そうやってつくってきた。それを全部同じように継承しろ、というのは難しい。今日的課題を解決していけるよう、経験を継承してもらえようようにしたい。

アメリカにいた1991年、アメリカでも仲間が同じことを言っていた。ADA法（Americans with Disabilities Act of 1990）の歓喜の中にあって、活動の成果を享受している若者が、どうやって実現したかを知らないでいる、それが問題だ、と。



● 熊本の県立学校ではエレベーターが整備される。愛知では、エレベーターがないまま過ごしてしまう。この差は何か？

(平野) 中学校で頸損になって、地域の高校へという子がいた。施設整備を確実にということ、で高校は必ず入れるようランクを落として高校へ入学した。入るのが分かっているの

に、何も対応されず、お母さんがエネルギーギッシュに動いて、エレベーターの予算を取った。なのに、エレベーターができたのは、卒業後だった、という失敗例を先ほど話した。

「こんなことではダメだ、初めから対応すべきだ」と議会で質問した。

でも、高校は入学試験があり、通るかどうかわからないのに予算はつけられない、と。確実に入ることが決まって、入った時点で、補正予算を組み、夏休みか、遅くても、1年後に、エレベータ設置となった。

最初の失敗事例があったからできたし、それを求めるのが、不当な要求ではない、と皆が思えるようになった。

卒業後にできたエレベーターは、しばらく障害者は入らず、使われることはなかったが、エレベーターがあるということで、何年か後に、障害のある子が入ってきた。エレベーターがあるという情報は、とても有効で、子どもたちが勇気づけられる。

障害を持った職員がいるということではエレベーターは付かなかった。生徒が入学して初めてつけられた。職員も要求しなかったのだろう。障害を持って勤めていると、過度な要求はできないと思うのでしょうか。



● 「いんくる」で、精神障害、発達障害者が参加して、気付いたことは？

(平野) 知的、精神の障害者に対応することに慣れていなかった。

知的障害者は、想像がつく。

精神障害者は、医療法人の事業所など同じ精神障害者が集まるところがあるが、そこではなく「いんくる」へ来る。医療法人がやっている事業者だと、管理されるのが嫌だから、とこっちにやってくるのかな、と。

刃物の扱いが危険な時もあるので、鋏や包丁の管理はきちんとする。仲間で集まるところも必要だし、一人でいてクールダウンするところも要る。

ヘルパーとの関係づくりは、肢体障害者は口で言えるが、知的障害者や精神障害者は、言葉でのコミュニケーションが難しい。トラブルとして終わらせるのではなく、好き嫌いに対応して、人をチェンジしたり、どう対応するか、考え、工夫していく。

聴覚障害者や視覚障害者は、ここには来ないが、条例づくりで一緒だったので、かかわりはある。

● 多目的トイレの調査で、多目的にしたが故に、使いにくいということがあった。UDから見て、これはいいというものはあるか？
(平野) ここのトイレは良いなあ～、というのが少ない。

個人差もある。

UDということで、1つの個室に、いろんなものを入れて、トイレが使いづらい。個性も大事だ。

熊本空港のトイレは、手すりと便器の位置関係がおかしい。片方の手すりは、便器に近く、もう片方は、遠い。

新幹線の熊本駅での、モックアップユニットを参考にされるといい。

十分広ければいいけど、狭いのに、ベッド、オストメイト、洗面台…。

韓国では、男女のトイレに、障害者用のブースがある。私たち女性にとって、男性が使わないということで、清潔感はある。しかし、異性介助だとうか。日本のように、ユニセックスのブースもあると、いいかな。